

建築の何がまちづくりなのか？

今、とてつもない大きな振子が揺れ戻しに入っている。経済繁栄を否定するものは誰もいない。こんなに豊かになって良いのだろうかと不安になっている先輩諸兄の言葉を聞いたのは、ついこの前である。創る技術をして建築はニーズに素直に応えて来た。その純粋な創る意欲のある建築は、時代を上手に表現している。青年部有志と、まちづくりの知と汗を出して8年目に入った。社会的に営利団体に属していない私は、市民社会の中でまちづくりに参加することで私自身の社会性を位置付けようとした。非営利団体である建築士会は、そのような意味で純粋でありつづけたい。生活者の眼で建築を都市を創ろうと、涙が出る程良い仲間と熱き想いをぶつけ合ってきた。行政主導型でないと動かない地域性の中で、出来ることからと、語り口調で提案して来た。中央から来た情報受け流し屋さんのイベント手法とはのっけから土俵の違うところで、血税をストック（社会

基盤）にするためのプログラムを主に抗って来た。

先日某民放TVで、茨城県の国民宿舎〈鶴の岬〉のユニークな企画運営紹介があった。日本一安く泊まれ、新鮮な魚介類の食事が、若く美しい女子職員さんのおもてなしだという。これぞリゾート！との張り切り具合だ。四半世紀、自然からの洗礼を受けたその建築の設計者阿久井喜孝氏の言葉が思い浮かんだ。断崖に立つ人工地盤の基壇部に町の人々が仕事に参加出来る部分をつくり、土木と建築の境界領域を廃し、人間と建築と自然が互いに抵抗する様態を正しく把握して、風化に耐える建築をつくるのだと……。つまり、自然と人間と建築のまちづくりであった。参加型の建築のパワーをみせつけられた。どっこい生きている人と建築、消費や政治の道具にされた建築と、どこか異なる本音が見えた。市民に支えられた建築は今、経済風化の中で真の生命を保ちつづけている。

（久保田）